

## トカラ語 A《*Saundaranandacaritanāṭaka*》における

### 《*Mahādevasūtra*》の引用について

荻原裕敏

キーワード: トカラ語仏典 阿含經典 「大天捺林經」 《*Mahādevasūtra*》

#### 要旨

本稿では、写真と転写のみが公表され、未だに十分な解釈が為されていないドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A128 及び A130(= THT761 及び THT763)の解釈を行う。転写が出版されて以降、後者の断片は部分的にトカラ語文法研究に利用されてきたが、全体的な解釈は未だに提出されていないだけでなく、この二断片が同一の folio に属する点はこれまでトカラ語研究者には知られていなかった。筆者は、当該二断片の新しい転写を提示すると共に、本 folio の a1-b2 が根本説一切有部の《*Madhyamāgama*》(中阿含)に属する《*Mahādevasūtra*》と比較され得る点を指摘する。一方、当該 folio において《*Mahādevasūtra*》に後続する部分は同經典中に対応箇所を持たず、裏面 b4 及び b5 に在証される難陀 (Toch.A *nande*) という人名から、本 folio は《*Saundaranandacaritanāṭaka*》と称される作品の一部であり、《*Mahādevasūtra*》に比定される箇所は、物語の展開によって同経より引用された部分であると推定される。

#### 1. 導入

現在知られているトカラ語 A 資料の大部分は、新疆ウイグル自治区より将来され、現在はドイツに所蔵されている写本断片であるが、これらの断片の内、状態の良いものは Sieg 及び Siegling によって 1921 年にローマ字転写が出版され、さらに代表的なテキストはドイツ語に翻訳された。ただ、これらの資料には未解明のものが相当数含まれており、本稿で扱う《*Saundaranandacaritanāṭaka*》と称される作品もその内の一つである。この作品は仏陀の異母兄弟・難陀 (Nanda) とその妻スンダリー (Sundarī) を主人公とした物語であり、馬鳴 (Aśvaghōṣa) による《*Saundarananda*》に関連する主題を扱っていると考えられ<sup>1</sup>、部分的に残存する奥書からタイトルが推定される<sup>2</sup>。トカラ語 A 断片中の少なからぬ数の断片がこの作品に関連するとされており、筆者は現在当該作品の復元作業を行っているが、本稿ではこの作業の成果の一つとして、当該写本に見られる《*Mahādevasūtra*》の引用を扱う。

ここで扱う断片は、写真と転写が公表されるのみで、未だに十分な解釈が為されていないドイツ所蔵の A128 及び A130(= THT761 及び THT763)の二点である。当該二断片の内、

<sup>1</sup> この作品の和訳としては、松涛 (1981) を参照。

<sup>2</sup> この作品のタイトルは完全には残っていないが、TochSprR(A): 252 に見られる同書 51 頁に対する補遺及び A127a4 (cf. TochSprR(A): 70) に在証される形式から、暫定的に《*Saundaranandacaritanāṭaka*》と復元される。

A130 はこれまで部分的にトカラ語文法研究に利用されてきたが、全体的な解釈は未だに提出されていないだけでなく、この二断片が同一の folio に属する点はこれまでトカラ語研究者には知られていなかった<sup>3</sup>。以下では、この二断片の新しい転写を提示すると共に、当該二断片から復元される folio の a1-b2 が根本説一切有部の《Madhyamāgama》(中阿含)に属する《Mahādevasūtra》と比較され得る点を指摘する。一方、当該 folio の《Mahādevasūtra》に後続する部分は同經典中に対応部分を持たず、裏面 b4 及び b5 に在証される難陀 (Toch.A nande) という人名から、本 folio は《Saundaranandacaritanāṭaka》の一部であり、《Mahādevasūtra》に比定される箇所は、物語の展開により同経より引用された部分であると推定される<sup>4</sup>。

## 2. ドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A128 及び A130 について

ドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A128 及び A130 は、1921 年に TochSprR(A): 70-71 で初めてローマ字転写が出版された断片である。現在はドイツ・ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) に所蔵されており、THT761 及び THT763 という登録番号が附されている(先行研究との繋がりを考慮し、本稿では A128 及び A130 とする)。この二断片はショルチュクで発見されたものであり、TochSprR(A): 51 の A89-143 に対する解説では同地の Stadthöhle で発見されたものとされている<sup>5</sup>。筆者の研究によって、この二断片は同一の folio に属する事が明らかになったが、この点についてはこれまでトカラ語研究者には知られていなかった。

A128 は folio の左端から紐穴の直前までを残しており、サイズは約横 10.3cm×縦 12.5cm であり、裏面左端に<202>という葉数が記されている。一方、A130 は紐穴右側以降の部分を残しているが、folio の右端部分を欠いており、サイズは約横 29cm×縦 12.5cm である。筆者の推定によれば、両断片の間には最短部分で約 2 akṣara 分の欠落が存在していると見られる(接合した状態については、本稿末尾の図版 1 を参照)<sup>6</sup>。前掲 TochSprR(A)の解説によれば、この写本に属する folio のサイズは約横 49cm×縦 12.5cm であると推定されるため、本断片の右側には最短部分で 8cm 弱の欠落があったものと考えられる。なお、断片の写真は TITUS・IDP 及び CETOM のサイトで閲覧可能である。前述のように、A128 には<202>という葉数が確認される事から、この folio を含む写本は大部のものであったと推定される

<sup>3</sup> 本稿で扱う A128 と A130 が同一の folio に属する可能性は、トカラ語 A 断片を校訂出版した Sieg 所有の TochSprR(A)の 70 頁(以下では TochSprR(A)Sieg とする)で示唆されているが、文献学的根拠は一切記されていない。筆者は Sieg の示唆とは全く独立して、当該の二断片が同一の folio に属する事を《Mahādevasūtra》への比定によって知り得た事を特記しておく。

<sup>4</sup> ドイツ所蔵断片 A101 (=THT734) a6 には *nimiṃ* とあり、これは *nimi\** の斜格形と解釈されるが、本稿で扱う《Mahādevasūtra》の主人公の子孫にはニミという名の王が登場し、また部分的に A128 + A130 と類似した内容が見られるため、同經典との関連が疑われるが、対応しない部分もあり、本稿では扱わない。なお、コータン語『ザンバスタの書』第 24 章第 46-53 詩節 (Emmerick 1968: 370-371) には、ニミと名乗る王が仏法による統治を指示した上で王位を息子に譲り、梵天界への再生を得た事が語られている。この前後の folio は大きく欠落しているが、《Mahādevasūtra》或いは《Nimijātaka》との関連が指摘されるかも知れない。

<sup>5</sup> 断片の発見場所である Stadthöhle が、当時トカラ語 A で *porociṃ* と称されていた寺院であった可能性については、Ogihara (2014a: 112-114) を参照。

<sup>6</sup> 本稿の図版では、IDP で公開されている画像を利用した。本画像の著作権は、Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften in der STAATSBIBLIOTHEK ZU BERLIN - Preussischer Kulturbesitz Orientabteilung に帰属する。

が、この folio の後に何葉程度の folio が続いていたのかを推定する事はできない。

また、TochSprR(A): 51 に指摘されるように、この二断片は難陀とスンダリーを主人公としており、トカラ語文献学では《Saundaranandacaritanāṭaka》と称される作品の一部であると考えられ、同一作品に属すると見られる他の断片から、全体は韻文を交えた散文で書かれていたと見られるが、本断片には韻文と推定される部分は残っていない。以下、この二断片を接合した folio のローマ字転写・音素転写及び和訳を与えるが、新たに読む事ができた部分があるため、ここで与える転写は、TochSprR(A)及び同書に基づく TITUS・CETOM のものとは一部異なっている点に注意されたい<sup>7</sup>。なお、欠落部分に推定される akṣara の数は確定的なものではなく、概算に過ぎない点を特記しておく。

## Transliteration

### a

- 1 *tmaṣ lapam* {- - - - - - - - -} *tam* - {- - -} ·s· *tsaram*<sup>[1]</sup> *tamy[o]*  
*ṣam* ·r· *skat*<sup>[2]</sup> *prākār* † (-) || *tmaṣ* *[ṣa]m* *ma[hā]*<sup>[3]</sup> {- - - - - - - - -}  
2 *wlalune* {- - - - - - - - -} *prop mahur ca[cā]l*<sup>[4]</sup> *pārwatāp seyo lapā*  
*caṣaṣ*<sub>[1]</sub> *lāntune kakālypā[m]* *oka*<sup>[5]</sup> {- - - - - - - - -}  
3 *rīṣ* *sne*<sup>[6]</sup> {- - - - -} O *kāt* *tmām śtwar wālṭṣ* *lāñcāṣ* † *okāt*<sub>[1]</sub>  
*tmām śtwar wālṭṣ* *āmāṣāṣ* *[okāt t](·)[m]*<sup>[7]</sup> {- - - - - - - - -}  
4 *lṭṣ* *atra [t]· p· ṣ* {- -} O *ntiṇaṣ*<sup>[8]</sup> *sewāṣ* † *ṣpat ṇemintu śtwar*  
*dvipantwā nātkune riṣā*<sup>[9]</sup> {- - - - - - - - - - - - - - -}  
5 *wṣe[ñ]ñ[e]* *eṃṣāt*<sup>[10]</sup> *o[kā]* {- -} *[śtw]· r wāl[ṭṣ]* *puklā wārtam pāṣune*  
*pāṣāt* *maitṭra kārūm mu[d]it* *u[p]e*<sup>[11]</sup> {- - - - - - - - - - - - - - -}  
6 *wlāṣ* *brahmalokaṃ ta[mā]* {-<sup>[12]</sup> -} - {- -} *mi*<sup>[13]</sup> *se [n<sub>u</sub>]nak* *mahādeva*  
*ñomā wāl tāk* *laprenāk* - {- - - - - - - - - - - - - - -}

### b

- 1 *waṣṭaṣ* *lāc*<sup>a</sup><sub>[1]</sub> *brahma* - {- - - -} <sup>[14]</sup> *[c]· mi se penu tamneḱ* *ñomā*  
*wāl* *tāk* *okāk* *[ṣi]*<sup>[15]</sup> {- - - - - - - - - - - - - - -}  
2 *mā*<sup>[16]</sup> *[ca]* - *varttiñā* *lā[ṣā]* {- -} *r*<sup>[17]</sup> *puk* *cem* *wlaluneyā mroskaṇt* *lap*  
*mārtkānt* *waṣṭaṣ* <sub>[18]</sub> {- - - - - - - - - - - - - - -}  
3 *pālkā[r]* *n·* <sup>[19]</sup> *cem* - {- -} O *pañā*<sup>[20]</sup> *pācri tamne wḱanyo tsopātṣam*  
*yātlune parnoreyo pā* - {- - - - - - - - - - - - - - -}  
4 *skar*<sup>[21]</sup> *wa* {- - - - -} O *k<sub>u</sub>val tu nande praski mā aṣṣātār mārtār*

<sup>7</sup> 以下の転写では、下記の方法を採用する。

[ ]: 破損によって読みが不確定な箇所

·: akṣara の欠けている子音若しくは母音

{ }: 破損により推定された欠落部分

( ): 筆者によって推定された箇所

†, ‡: 断片中の punctuation

なお、西域北道で使用されたブラーフミー文字中、梵語写本では使用されない Fremdzeichen と称される特殊な文字については、慣習に従い下線を附す。

śol tāpār<sub>k</sub> ymār wrasa[śś]· - [s]k<sup>[22]</sup> - (·)[k]<sup>[23]</sup> {- - - - - - - -}  
 5 mā<sup>[24]</sup> nāṣ na - {- - - - - -} - lkā[mā] kusne mā walu tāṣ mā  
 pat<sub>l</sub> wlatār<sub>l</sub> tāmyo nande wlaluneyā[śā] (-) {- - - - - -}  
 6 ṣ<sup>[25]</sup> lāmṣāl<sub>l</sub> {- - - - - -} trāṅka<sup>[26]</sup> {- - -} k<sub>l</sub> kusne waṣṭāṣ  
 ·am ·e<sup>[27]</sup> kus [pa]t nu waṣṭ<sub>l</sub> ṣmeñc<sup>a</sup> kus ces[m]i {- - - - - -}

# Transcription

## a

1 tmāṣ lapam {- - - - - -} tām - {- - -} ·s· tsaram<sup>[1]</sup> tāmy[o]  
 sām (m)r(o)skat<sup>[2]</sup> prākār ‡ (-) || tmāṣ [sā]m ma[hā](deve)<sup>[3]</sup> {- - - - -}  
 2 wlalune {- - - - - -} prop mahur ca[cā]l<sup>[4]</sup> pārwatāp seyo lapā  
 casās lāntune kakālypā[m] okā(t)<sup>[5]</sup> {- - - - - -}  
 3 rīs sne<sup>[6]</sup> {- - - -} (o)- O kāt tmām śtwar wāṭs lāñcās † okāt tmām  
 śtwar wāṭs āmāsās [okāt t](mā)[m]<sup>[7]</sup> {- - - - - -} (wā)-  
 4 lts atra [t](am)p(e)s (mṣapa)- O ntinās<sup>[8]</sup> sewās † ṣpāt ñemintu śtwar  
 dvipāntwā nātkune risā(t)<sup>[9]</sup> {- - - - - - - - - - -}  
 5 wṣe[ñ]ñ[e] eṃtsāt<sup>[10]</sup> o[kā](t tmām) [śtw](a)r wāl[ts] puklā wārtam pāpṣune  
 pāṣāt maittrā kārūm mu[d]it u[p]e(kṣ)<sup>[11]</sup> {- - - - - - - - - - -}  
 6 wlās brahmalokaṃ ta[mā](t)<sup>[12]</sup> {-} - {-} (ca)mi<sup>[13]</sup> se [n<sub>u</sub>]nak mahādeve  
 ñomā wāl tāk tāprenāk - {- - - - - - - - - - -}

## b

1 waṣṭāṣ lāc brahma - {- - - -} <sup>[14]</sup> [c](a)mi se penu tāmnek ñomā wāl  
 tāk okāk [ṣi]<sup>[15]</sup> {- - - - - - - - - - -} (ño)-  
 2 mā<sup>[16]</sup> [ca](kra)varttiñ lā[ś] (tāka)r<sup>[17]</sup> puk cem wlaluneyā mroskant lap  
 mārṭkānt waṣṭāṣ (lcār)<sup>[18]</sup> {- - - - - - - - - - -}  
 3 pālkā[r] n(ande)<sup>[19]</sup> cem - {-} O pañ<sup>[20]</sup> pācri tāmne wkānyo tsopatsām  
 yātlune parnoreyo pā - {- - - - - - - - - - -}  
 4 skar<sup>[21]</sup> wa {- - - - -} O k<sub>u</sub>yal tu nande praski mā arāṣṭār mārṭār  
 śol tāpār<sub>k</sub> ymār wrasa[śś](i pra)[s]k(i)<sup>[22]</sup> - (·)[k]<sup>[23]</sup> {- - - - - - -} (ño)-  
 5 mā<sup>[24]</sup> nāṣ na - {- - - - - -} - lkā[mā] kusne mā walu tāṣ mā  
 pat wlatār tāmyo nande wlaluneyā[śā] (-) {- - - -} (waṣṭā)-  
 6 ṣ<sup>[25]</sup> lāmṣāl {- - - - - - -} trāṅka<sup>[26]</sup> {- - -} k kusne waṣṭāṣ  
 (l)ām(ts)e<sup>[27]</sup> kus [pa]t nu waṣṭ ṣmeñc kus ces[m]i {- - - - - - -}

# 注釈

a1: 次節で提示する対応仏典『中阿含經』「大天捺林經」中の「阿難。彼大天王則於後時告  
 剃鬚人。汝若見我頭生白髮者，便可啟我。於是，剃鬚人受王教已，而於後時沐浴王頭，  
 見生白髮，見已，啟曰。天王。當知天使已至，頭生白髮。彼大天王復告剃鬚人。汝持金

鐺徐拔白髮，著吾手中。時，剃鬚人聞王教已，即以金鐺徐拔白髮，著王手中。阿難。彼大天王手捧白髮而說頌曰。我頭生白髮，壽命轉衰滅，天使已來至，我今學道時。」(T.01, no. 26, 513b27-c8) 及びパーリ語《Makhādevasutta》: *atha kho, Ānanda, rājā Makhādevo bahunnaṃ vassānaṃ bahunnaṃ vassasatānaṃ bahunnaṃ vassasahassānaṃ accayena kappakaṃ āmantesi: yadā me, samma kappaka, passeyyāsi sirasmiṃ phalitāni jātāni, atha me āroceyyāsi ti. evaṃ devā ti kho, Ānanda, kappako rañño Makhādevassa paccassosi. addasā kho, Ānanda, kappako bahunnaṃ vassānaṃ bahunnaṃ vassasatānaṃ bahunnaṃ vassasahassānaṃ accayena rañño Makhādevassa sirasmiṃ phalitāni jātāni, disvāna rājānaṃ Makhādevaṃ etad avoca: pātubhūtā kho devassa devadūtā; dissanti sirasmiṃ phalitāni jātāni ti. tena hi, samma kappaka, tāni phalitāni sādhukaṃ saṇḍāsena uddharitvā mamaṃ añjalismiṃ paṭiṭṭhāpehi ti. evaṃ devā ti kho, Ānanda, kappako rañño Makhādevassa paṭisutvā tāni phalitāni sādhukaṃ saṇḍāsena uddharitvā rañño Makhādevassa añjalismiṃ paṭiṭṭhāpesi.* (MN II: 75, II.1-15) を参照<sup>8</sup>。対応部分は、上記引用の下線部及び太字部分に相当する。

- (1): 残存部分冒頭は、剃鬚人が国王の頭に白髪を発見する場面の描写であり、欠落部分以降は国王が手の上に置かれた自らの白髪を確認する場面であると推定されるが、トカラ語A本文を推定する事は困難である。なお、A130a1 冒頭の *tām* は指示代名詞中性主格・斜格形の可能性もあるが、恐らくは三人称単数過去中動態語尾-*t* に代名詞接辞三人称複数形-(*a*)*m* が附されたものと推定される。この推定が正しいならば、代名詞接辞によって指示されるのは、Mahādeva 王の頭に生えた白髪と考えられる。
- (2): TochSprR(A)Sieg: 70 の書き込みによれば、この部分には *mrosk-* ‘to feel an aversion to the world’ の三人称単数過去形中動態(*m*)*r(o)skat* が推定される。上引の《Mahādevasūtra》への比定により、この推定は正しい事が裏付けられる。
- (3): TochSprR(A)Sieg: 71 は、表面 a6 に基づいて *mahā(deve)* を推定する。なお、後続する部分は、Mahādeva 王が王位を長子に譲る場面に相当する。

a2-4: 『中阿含経』『大天捺林経』『彼大天王見白髮已，告太子曰。太子。當知天使已至，頭生白髮。太子。我已得人間欲，今當復求天上之欲。太子。我欲剃除鬚髮，著袈裟衣，至信、捨家、無家、學道。太子。我今以此四天下付授於汝，汝當如法治化，莫以非法，無令國中有諸惡業，非梵行人。』(T.01, no. 26, 513c9-14) 及びパーリ語《Makhādevasutta》: *atha kho, Ānanda, rājā Makhādevo kappakassa gāmavaraṃ datvā jeṭṭhaputtaṃ kumāraṃ āmantāpetvā etad avoca: pātubhūtā kho me, tāta kumāra, devadūtā, dissanti sirasmiṃ phalitāni jātāni. bhuttā kho pana me mānusakā kāmā; samayo dibbe kāme pariyesitum. ehi tvam, tāta kumāra, imaṃ rajjaṃ paṭipajja; ahaṃ pana kesamassum ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajissāmi. tena hi, tāta kumāra, yadā tvam pi passeyyāsi sirasmiṃ phalitāni jātāni, atha kappakassa gāmavaraṃ datvā jeṭṭhaputtaṃ kumāraṃ sādhukaṃ*

<sup>8</sup> パーリ語《Makhādevasutta》は、梵語《Mahādevasūtra》に対応する。この点については、BHSD: 422b-423a を参照。



*rajje samanūsāsivā kesamassuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajeyyāsi. yena me idaṃ kalyāṇaṃ vaṭṭaṃ nihiṭaṃ anuppavatteyyāsi mā kho me tvaṃ antimapuriso ahoṣi. yasmim̐ kho, tāta kumāra, purisaṃyuge vattamāne evarūpassa kalyāṇassa vattassa samucchēdo hoti, so tesam̐ antimapuriso hoti. tan tāhaṃ, tāta kumāra, evaṃ vadāmi: yena me idaṃ kalyāṇaṃ vaṭṭaṃ nihiṭaṃ anuppavatteyyāsi, mā kho me tvaṃ antimapuriso ahoṣi ti.* (MN II: 75, I.15-76, I.2) を参照。

- (4): TochSprR(A)Sieg: 71 は、*tāl-* ‘to raise’ の三人称単数過去形能動態の *ca(cā)l* を推定するが、Mahādeva 王が王冠を長子に譲る場面と考えられる点及び断片の残存部分から、この推定が裏付けられる。なお、この部分は、『根本説一切有部律 (*Mūlasarvāstivāda-vinaya*, 以下特に断らない限り、梵文だけでなく、漢訳・藏訳も含む)』中の『薬事 (*Bhaiṣajyavastu*)』所引の《*Mahādevasūtra*》には見られない。
- (5): 転輪聖王に付随する属性を長子に相続させる場面の描写であるが、藤田 (1954: 152) に指摘されるように、例えば Mahāsudassana という転輪聖王は「八万四千の都城・高堂・楼閣・牀座・龍象・馬・車・珠・女・居士・刹帝利・乳牛・布・乳粥」を有していた点がパーリ語仏典には記されており<sup>9</sup>、複数の可能性が指摘されるため、欠落部分の名詞を確定する事ができない。なお、転輪聖王に付随する属性を長子に相続させる描写は、『薬事』所引の《*Mahādevasūtra*》には見られない。
- (6): ここには、*sne lyipār* ‘entire’ が推定されるかも知れない。
- (7): 上記注釈 (5) と同様に、転輪聖王に付随する属性を長子に相続させる場面の描写であるが、複数の可能性が指摘されるため、欠落部分冒頭の *okāṭ t(mā)ṃ (śtwar wāṭts)* を除き、欠落部分の内容を推定する事ができない。
- (8): TochSprR(A)Sieg: 70 は、本行冒頭に *(wā)lts* を、紐穴左側の欠落部分に *(mṣapa)ntinās* を推定する<sup>10</sup>。また、この両者の間にある語については、TochSprR(A): 70 fn. 1 が *t(am)p(e)s* の可能性を指摘する。八尾 (2007: 367 注 16) によれば、転輪聖王の子について、『根本説一切有部律』などの根本説一切有部系の文献はいずれも *pūrṇaṃ cāsyā bhavati sahasraṃ putrāṇāṃ śūrāṇāṃ vīrāṇāṃ varāṅgarūpīṇāṃ parasainyapramardakāṇāṃ* 「かれにはまた、勇猛であり、勇敢であり、最もすぐれた肢体の姿をもち、敵の軍勢を破る、千人もの息子が生まれた」(八尾 op.cit.: 368) となっており<sup>11</sup>、これらの推定が支持される。
- (9): TochSprR(A)Sieg: 71 に従い、語根 *ri-n-* ‘to renounce, abandon’ の三人称単数過去形中動態 *risā(t)* を推定する。
- a5-6: 『薬事』所引の《*Mahādevasūtra*》及び『中阿含経』『大天柰林経』は、トカラ語 A のものと異なり、四無量心や梵天界への再生には言及しないが、『増一阿含経』『序品』『爾

<sup>9</sup> 関連する記述としては、DN II: 187-188 を参照。

<sup>10</sup> 冒頭の語については、Poucha (1955: 300) も *(wā)lts* を推定している。

<sup>11</sup> 対応する梵文は八尾 (op.cit.: 367 注 13) に引用されているが、SBhV I: 49, II.10-12 を参照。なお、コータン語『ザンバスタの書』第 22 章第 142 詩節: *tcūrysanyai hīna ysāruī pūra śśūra dātāna aggamiṣa handarye hīne nihajjāka hodai ratāna hāmāre* ‘He will have a fourfold army. He will have a thousand sons, heroes, blameless in appearance, suppressors of the foreign army. He will have the seven jewels.’ (Emmerick 1968: 310-311) も参照。

時，王摩訶提婆以王之位授太子已，復以財寶賜與劫比，便於彼處剃除鬚髮，著三法衣，以信堅固，出家學道，離於衆苦。於八萬四千歲善修梵行，行四等心，慈、悲、喜、護，身逝命終，生梵天上。」(T.02, no. 125, 552a10-14) や同経「禮三寶品・四」「大天王於此城，於此園，於此地，下鬚髮，著法服入道，於此處八萬四千歲，行四梵行、慈、悲、喜、護，於是壽終得生梵天。」(T.02, no. 125, 808b13-16) 及びパーリ語《Makhādevasutta》: *atha kho, Ānanda, rājā Makhādevo kappakassa gāṃvaram datvā jeṭṭhaputtam kumāram sādhuṇam rajje samanūsāsivā imasmim yeva Makhadevambavane kesamassuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyam pabbajī. so mettāsahagatena cetasā ekaṃ disaṃ pharitvā vihāsi, tathā dutiyam, tathā tatiyam, tathā catutthim; iti uddham adho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantam lokam mettāsahagatena cetasā vipulena mahaggatena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā vihāsi. karuṇāsahagatena cetasā — pe — muditāsahagatena cetasā, upekkhāsahagatena cetasā ekaṃ disaṃ pharitvā vihāsi, tathā dutiyam, tathā tatiyam, tathā catutthim; iti uddhamadho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantam lokam upekkhāsahagatena cetasā vipulena mahaggatena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā vihāsi. rājā kho pan', Ānanda. Makhādevo caturāsītivassasahassāni kumārakīlikam kīli; caturāsītivassasahassāni oparajjam kāresi; caturāsītivassasahassāni rajjam kāresi; caturāsītivassasahassāni imasmim yeva Makhādevambavane agārasmā anagāriyam pabbajito brahmacariyaṃ cari. so cattāro brahmavihāre bhāvetvā kāyassa bhedaṃ param maraṇā brahmalokūpago ahosi.* (MN II: 76, 11.3-23) には、対応する記述が確認される。

- (10): トカラ語A断片 A101a3 及び A107a1 (= THT734 及び THT740) から、この箇所は(*waṣṭāṣ lāc wārt*) *wṣeññe emtsāt* と再建される。なお、Poucha (1955: 296) によれば、Toch.A: *wārt wṣeññe* は、梵語 *vanavāsa*- 'dwelling or residence in a forest' (MW: 918a) に対応する。
- (11): TochSprR(A)Sieg: 71 は《Mahāvvyutpatti》: 69 を根拠に *upe(kṣ)* を推定する。前掲『増一阿含経』及びパーリ語《Makhādevasutta》には、主人公の王が出家後、四無量心を修した点が記されている。
- (12): TochSprR(A)Sieg: 70 に従い、*tām*- 'to be born' の三人称単数過去形中動態 *tamā(t)* を推定する。関連する記載は、前掲『増一阿含経』及びパーリ語《Makhādevasutta》の引用部分末尾に見られる。
- a6-b2: 『中阿含経』「大天椋林経」「阿難。是為從子至子，從孫至孫，從族至族，從見至見，展轉八萬四千轉輪王，剃除鬚髮，著袈裟衣，至信、捨家、無家、學道，學仙人王修行梵行，在此彌薩羅大天椋林中。」(T.01, no. 26, 514, b4-8) 及びパーリ語《Makhādevasutta》: *rañño kho pan', Ānanda, Makhādevassa puttapaputtakā tassa paramparā caturāsītikhattiya-sahassāni imasmim yeva Makhādevambavane kesamassuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyam pabbajimsu.* (MN II: 78, 11.8-11) を参照。
- (13): TochSprR(A)Sieg: 71 及び Thomas (1986: 127) は代名詞男性単数属格形(*ca*)*mi* が推定される可能性を指摘しており、後続する b1 が推定の根拠となっていると考えられる。八

尾(2007: 361 脚注 32)が指摘するように、現在知られている《Mahādevasūtra》の内、歴代の王が代々 Mahādeva を名乗った点は『根本説一切有部律』中の『菓事』にのみ見られる。この点については、以下で改めて取り上げる。なお、この語に先行する欠落部分には、*tmāṣ* ‘thereupon’ が推定されるかも知れない。

- (14): 前掲パーリ語《Makhādevasutta》: *caturāsītivassasahassāni imasmim yeva Makhādevambavane agārasmā anagāriyaṃ pabbajito brahmacariyaṃ carī. so cattāro brahmavihāre bhāvetvā kāyassa bhedaṃ param maraṇā brahmalokūpago ahosi.* (MN II: 78, ll.4-7) によれば、「梵行を修した」「梵天界に赴いた」の二つの可能性が考えられるが、《Mahādevasūtra》において重点は前者にあると考えられるため、この箇所は「梵行を修した」に相当する内容を有していたと推定され、欠落部分は *brahma(cār yāmtsāt)* と再建されるかも知れない。
- (15): 後続する b2 と併せて、この箇所は Mahādeva 王の残した相続法が、子々孫々受け継がれていった事を述べていると見られる。この推定が正しいならば、ここに見られる *ṣi* は *ṣi(tsrāk)* ‘in one row’ であるかも知れない。
- (16): 先行する b1 と後続部分の内容から、ここには *ñom* ‘name’ の単数通格形(*ñomā*) が推定される。注釈(13)で言及したように、本 folio の a6-b1 には Mahādeva 王の子孫も Mahādeva と名乗った事が記されており、先行する b1 の欠落部分にはその旨の記述があったものと考えられる。ただし、具体的なトカラ語 A の本文がどのようであったかという点については、本 folio の a6-b1 に見られる二通りが考えられ、どちらとも決定し難い。
- (17): トカラ語 A 断片 A101a4 の在証例から、ここには *nas-* ‘to be’ の三人称複数過去形能動態(*tāka*)*r* が推定される。
- (18): TochSprR(A)Sieg: 71 及び文脈により、*lā-n-t-* ‘to go out’ の三人称複数過去形能動態 *lcār* を推定する。
- (19): TochSprR(A)Sieg: 71 及び文脈により、*nande* ‘Nanda’ の呼格 *na(nde)* を推定する。
- (20): 名詞の複数形が文脈から期待されるが、具体的な語形を推定する事は困難である。
- (21): 先行する部分を欠いており、確実な推定を行い得ないが、動詞の三人称複数過去形能動態或いは小辞 *kar* ‘yet, really, for sure (?)’ を含んでいる可能性が指摘される。
- (22): TochSprR(A)Sieg: 71 は、この部分が *wrasaś(i pra)sk(i)* と推定される可能性を指摘する。
- (23): 語根 *māsk-* ‘to be’ の三人称単数現在形 *māskatār* が再建されるかも知れない。
- (24): この部分が『中阿含経』『大天棕林経』『阿難。昔大天王者汝謂異人耶。莫作是念、當知即是我也。』(T.01, no. 26, 515a7-8) 及びパーリ語《Makhādevasutta》: *siyā kho pana te. Ānanda, evaṃ assa: añño nūna tena, samayena rājā Makhādevo ahosi, yena taṃ kalyāṇaṃ vaṭṭaṃ nihiṭaṃ ti. Na kho paṇ’ etaṃ, Ānanda, evaṃ daṭṭhabbaṃ. ahaṃ tena samayena rājā Makhādevo ahosiṃ.* (MN II: 82, ll.19-22) に対応するならば、ここには *ñom* ‘name’ の単数通格形(*ñomā*) が推定される。
- (25): 文脈から、ここには *waṣt* ‘house’ の単数奪格形(*waṣtā*)*s* が推定される。
- (26): 語根 *trānk-* ‘to say’ の三人称単数現在形能動態 *trānkā(s)* が推定されるが、後続する部分



を推定する事は困難である。

(27): TochSprR(A)Sieg: 71 及び SSS: 465 に従い、語根 *lā-n-t-* ‘to go out’ の三人称複数現在形 (*l)ām(ts)e* を推定する。

# Reconstructed text<sup>12</sup>

[a1] *tmāṣ lapam* {- - - - - - - -} *tām* {- - -} *tsaram tāmy[o]*  
*sām (m)r(o)skat prākār ‡ (-) || tmāṣ [sā]m ma[hā](deve)* {- - - - -}  
[a2] *wlalune* {- - - - - - - -} *prop mahur ca[cā]l pārwatāp seyo lapā*  
*casās lāntune kakālypā[m] okā(t tmām śtwar wāts)* {- -} [a3] *rīs sne* {- - -<sup>(a)</sup>  
-} *(o)kāt tmām śtwar wāts lāñcās ‡ okāt tmām śtwar wāts āmāsās [okāt*  
*t](mā)[m] (śtwar wāts)* {- - - -} *(wā)-[a4]lts atra [t](am)p(e)s (mṣapa)ntinās*  
*sewās ‡ śpāt ñemintu śtwar dvipāntwā nātkune risā(t)* {- - - -} *(waštāṣ lāc*  
*wārt)* [a5] *wṣef[ñ]ñ[e] eṃtsāt o[kā](t tmām) [śtw](a)r wāl[ts] puklā wārtam pāpṣune*  
*pāṣāt maittrā kārūm mu[d]it u[p]e(kṣ)* {- - - - - - - - - - - - - - -}  
[a6] *wlās brahmalokaṃ ta[mā](t)* {-} - {-<sup>(b)</sup>} *(ca)mi se [n<sub>u</sub>]nak mahādeve ñomā*  
*wāl tāk tāprenāk* - {- - - - - - - - - - - - - -} [b1] *waštāṣ lāc*  
*brahma* - {- - - -} [c] *(a)mi se penu tāmnek ñomā wāl tāk okāk [ṣi]*  
{- -<sup>(d)</sup> - - - - - - - - - -} *(ñō)-[b2]mā [ca](kra)varitiñ lā[ś] (tāka)r*  
*puk cem wlaluneyā mroskant lap mārktānt waštāṣ (lcār)* {- - - - - - - - -  
*- -} [b3]pālkā[r] n(ande) cem* - {-} *pañ pācri tāmne wkānyo tsopatsām*  
*yātlune parnoreyo pā* - {- - - - - - - - - - - - - -} [b4] *skar wa* {- -  
*- - -} k<sub>w</sub>yal tu nande praski mā arāštār mārktār śol tāpār k ymār wrasa[śś](i*  
*pra)[s]k(i) - (-)[k]·* {- -<sup>(e)</sup> - - - - -} [f] *(ñō)-[b5]mā nāṣ na* - {- - - -  
*- -} - lkā[mā] kusne mā walu tāṣ mā pat wlatār tāmyo nande*  
*wlaluneyā[śā] (-) {- - - -} (waštā)-[b6]ṣ lāmṣāl* {- - - - - - - - -}  
*trānkā(ṣ) {- -} k kusne waštāṣ (l)ām(ts)e kus [pa]t nu wašt ṣmeñc kus*  
*ces[m]i* {- - - - - - - -}

## Notes

(a): *lyipār* (?) (b): *tmāṣ* (?) (c): *brahmacār yāmtsāt* (?) (d): *ṣitsrāk* (?) (e): *māskātār* (?)  
(f): *mahādeve(m)* (?)

## 和訳

a

- [...] それから、彼(= 剃鬚人)は(Mahādeva 王の)頭に [...] それらを [...] した。[...] 手の上に [...] それによって、彼(= Mahādeva 王)は堅く厭世観を抱いた。それから、かの Mahādeva 王は [...]

<sup>12</sup> 以下のテキストには先の注釈で言及した推定も含めているが、不確実な推定に留まるものについては、注釈で記すに留める。

- 2 [...] 死 [...] 彼(= Mahādeva 王)は王冠を持ち上げ、長子の頭に置き、王権を彼に与えた。  
八(万四千) [...]
  - 3 [...] 城を全て(?)、八万四千の王達、八万四千の大臣達<sup>[1]</sup>、八万(四千) [...]
  - 4 [...] 英雄のような力を備えた將軍たる千人の息子達<sup>[2]</sup>、七宝、四大洲に対する支配を放棄した。 [...]
  - 5 [...] 彼(= Mahādeva 王)は(出家し、林に住し)、八万四千年にわたって林で梵行を修した。  
慈・悲・喜・捨 [...]
  - 6 [...] 彼(= Mahādeva 王)は死に、梵天界に生まれた。(それから?)彼の息子は、また Mahādeva という名前の王となった。同様に<sup>[3]</sup> [...]
- b
- 1 [...] 出家し、梵(行を修した)。彼の息子は、また同じ名前の王となった。代々(?) [...] まで [...]
  - 2 [...] (八万四千の Mahādeva) という名前の転輪聖王達が(存在した)<sup>[4]</sup>。彼らは全て死によって厭世観を抱き、剃髪し、出家した。 [...]
  - 3 [...] 見なさい、難陀よ<sup>[5]</sup>。彼等 [...] 父親のそのような方法に従って、大いなる能力と輝きによって [...]
  - 4 [...] 難陀よ、お前は何故恐れを抱かないのか。短い命は今やとても儚く、人々の恐れとなっている(?)。 [...]
  - 5 [...] (その時、Mahādeva) という名前の者が私である(?)。 [...] 私は死ななかったかも知れない者、或いは死なないであろう者を見る。それ故に、難陀よ、死から [...]
  - 6 [...] 出家しなければならない。 [...] 彼は言う。 [...] 出家する者達、或いは家に留まる者達(= 在家の者達)、何が [...] 彼らの [...]

#### 注釈

- (1): 転写に対する注釈(5)で言及したように、転輪聖王に付随する属性に関する描写であるが、「八万四千の大臣達」という項目は見られない。ただし、藤田 (1954: 152) によれば、転輪聖王には「婆羅門・居士・都市人・地方人・主財官・司政官・衛兵・門衛・大臣・廷臣・諸王・富豪・王子達」が付随するとされる事があり<sup>13</sup>、ここには「諸王・大臣」の両者が確認される。
- (2): 転写に対する注釈(8)で言及したように、根本説一切有部系の文献は転輪聖王の子について、いずれも *pūrṇaṃ cāśya bhavati sahasraṃ putrāṇāṃ śūrāṇāṃ vīrāṇāṃ varāṅgarūpīṇāṃ parasainyapramardakāṇāṃ* 「かれにはまた、勇猛であり、勇敢であり、最もすぐれた肢体の姿をもち、敵の軍勢を破る、千人もの息子が生まれた」(八尾 2007: 368)としている点を参照すれば、Poucha (1955: 300) に言及される *wāḷts-atra-tampe* ‘vim mille heroum habens’ (千人の英雄の力を持つ) という解釈は放棄されるべきである<sup>14</sup>。

<sup>13</sup> 関連する記述としては、DN III: 148 を参照。

<sup>14</sup> なお、これとは別に Poucha (op.cit.: 4) は *atra-tampe* ‘vi herois praeditus’ (英雄の力を備えた) という項目も

- (3): ここで言う「同様に」とは、転写に対する注釈 a6-b2 で引用した平行話が示すように、Mahādeva 王の長子が、父 Mahādeva 王と同様に白髪の見えを契機に長子に王権を譲り、出家した上で梵行を修するという相続法を継続させた事を述べている。Mahādeva 王の長子が父王と同様の相続法を守った点は、対応する『中阿含経』『大天椋林経』及びパーリ語《Makhādevasutta》などにも語られており、関連する場面では父王と基本的には同じ描写が繰り返されている。
- (4): 次節に挙げる(根本)説一切有部系の資料との対応から、「八万四千」が推定される。
- (5): 本 folio の b5-6 に在証される難陀は、《Mahādevasūtra》には登場しない。上で推定したように b3 にも *nande* が在証されるならば、これ以降には《Mahādevasūtra》とは異なる内容が続く事となる。筆者は、これに先行する部分が《Mahādevasūtra》よりの引用であり、後続部分は、仏陀が難陀に出家を勧める《Saundaranandacaritanāṭaka》の場面であると見做す事が妥当であると考えている。

### 3. ドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A128 + A130 の比定について

本節では、前節で転写・和訳を与えた A128 + A130 の比定を行う。既に前節の注釈で言及したように、筆者の研究によれば、この二断片から復元される folio の a1-b2 の記述は後続する部分とは異なる内容に属していると考えられ、その内容は漢訳『中阿含経』『大天椋林経』及びパーリ語《Makhādevasutta》などに対応する。この仏典は仏教学研究では早くから注目されており、関連する研究も数多いが、ここでは蔵訳を中心に体系的に本仏典の諸異本を扱った八尾(2007 及び 2013a)に基づいて論を進める。

八尾(2007: 373-372)によれば、この仏典に対応するものはパーリ語・漢訳・蔵訳中に知られているが、現在知られている梵語仏典中には完全には存在しておらず、梵文『薬事』に省略された形で引用されるのみであり<sup>15</sup>、経名は『薬事』の記述から《Mahādevasūtra》と称される。このように関連する文献は数多いため、トカラ語 A 仏典における引用の内容理解に資するものとして、ここでは特に以下の仏典を挙げる。

[パーリ語]: *Makhādevasutta* (MN, no. 83, II: 74-83)

[漢訳]: 『中阿含経』卷第十四・王相應品「大天椋林経」(T.01, no. 26, 511c21-515b02)

[蔵訳]: 『薬事』(cf. 八尾: 2007 及び八尾 2013a: 133-140, 334-339)<sup>16</sup>

『俱舍論註ウパーイカー (*Abhidharmakośopāyikā*)』(cf. 本庄 2014: 222-224 [2050])

立てており、Thomas (1964: 77) は *atra-tampe* 'Heldenkraft besitzend' としている。また、Carling (2009: 7a) もこの解釈に従っている。

<sup>15</sup> 梵文『薬事』における対応箇所は八尾(2007: 374)に指摘されているが、GM III-1: 111-114を参照。

<sup>16</sup> 蔵訳『薬事』の対応箇所については、八尾(2007: 375-374)を参照。

上記三つの仏典を含め、「*Mahādevasūtra*」に対応する仏典の基本的な内容は同一であり、またいずれも非常に長いため、以下ではパーリ語及び漢訳仏典から、トカラ語 A 断片 A128 + A130 に直接関連する部分のみを引用する。

[パーリ語]: MN, no. 83: *Makhādevasutta*

*bhūtapubbaṃ, Ānanda, imissā yeva Mithilāyaṃ rājā ahosi Makhādevo nāma dhammiko dhammarājā dhamme ʃhito mahārājā dhammaṃ carati brāhmaṇagahapatikesu negamesu c' eva jānapadesu ca, uposathaṃ ca upavasati cātuddasiṃ pañcaddasiṃ aṭṭhamiṃ ca pakkhassa. atha kho, Ānanda, rājā Makhādevo bahunnaṃ vassānaṃ bahunnaṃ vassasatānaṃ bahunnaṃ vassasahassānaṃ accayena kappakaṃ āmantesi: yadā me, samma kappaka, passeyyāsi sirasmiṃ phalitāni jātāni, atha me āroceyyāsi ti. evaṃ devā ti kho, Ānanda, kappako rañño Makhādevassa paccassosi. addasā kho, Ānanda, kappako bahunnaṃ vassānaṃ bahunnaṃ vassasatānaṃ bahunnaṃ vassasahassānaṃ accayena rañño Makhādevassa sirasmiṃ phalitāni jātāni, disvāna rājānaṃ Makhādevaṃ etad avoca: pātubhūtā kho devassa devadūtā; dissanti sirasmiṃ phalitāni jātāni ti. tena hi, samma kappaka, tāni phalitāni sādhuṃ saṇḍāsena uddharitvā mamaṃ añjalismiṃ paṭiṭṭhāpehi ti. evaṃ devā ti kho, Ānanda, kappako rañño Makhādevassa paṭisutvā tāni phalitāni sādhuṃ saṇḍāsena uddharitvā rañño Makhādevassa añjalismiṃ paṭiṭṭhāpesi. atha kho, Ānanda, rājā Makhādevo kappakassa gāṃavaraṃ datvā jeṭṭhaputtaṃ kumāraṃ āmantāpetvā etad avoca: pātubhūtā kho me, tāta kumāra, devadūtā, dissanti sirasmiṃ phalitāni jātāni. bhuttā kho pana me māṇusakā kāmā; samayo dibbe kāme pariyesituṃ. ehi tvaṃ, tāta kumāra, imaṃ rajjaṃ paṭipajja; ahaṃ pana kesamassuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajissāmi. tena hi, tāta kumāra, yadā tvaṃ pi passeyyāsi sirasmiṃ phalitāni jātāni, atha kappakassa gāṃavaraṃ datvā jeṭṭhaputtaṃ kumāraṃ sādhuṃ rajje samanūsāsivā kesamassuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajeyyāsi. yena me idaṃ kalyāṇaṃ vaṭṭaṃ nihitaṃ anuppavatteyyāsi mā kho me tvaṃ antimapuriso ahosi. yasmiṃ kho, tāta kumāra, purisayuge vattamāne evarūpassa kalyāṇassa vattassa samucchethoti, so tesam antimapuriso hoti. tan tāhaṃ, tāta kumāra, evaṃ vadāmi: yena me idaṃ kalyāṇaṃ vaṭṭaṃ nihitaṃ anuppavatteyyāsi, mā kho me tvaṃ antimapuriso ahosi ti.*

*atha kho. Ānanda, rājā Makhādevo kappakassa gāṃavaraṃ datvā jeṭṭhaputtaṃ kumāraṃ sādhuṃ rajje samanūsāsivā imasmiṃ yeva Makhādevambavane kesamassuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajī. so mettāsahagatena cetasā ekaṃ disaṃ pharitvā viḥāsi, tathā dutiyaṃ, tathā tatiyaṃ, tathā catutthiṃ; iti uddham adho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantam lokam mettāsahagatena cetasā vipulena mahaggatena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā viḥāsi. karuṇāsahagatena cetasā — pe — muditāsahagatena cetasā, upekkhāsahagatena cetasā ekaṃ disaṃ pharitvā viḥāsi, tathā dutiyaṃ, tathā tatiyaṃ, tathā catutthiṃ; iti uddhamadho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantam lokam upekkhāsaha-*



gatena cetasā vipulena mahaggaṭena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā viḥāsi. rājā kho pan', Ānanda. Makhādeva caturāsītivassasahassāni kumārakīlikam kīli; caturāsītivassasahassāni oparajjam kāresi; caturāsītivassasahassāni rajjam kāresi; **caturāsītivassasahassāni imasmim yeva Makhādevambavane agāasmā anagāriyam pabbajito brahmacariyam cari.** so cattāro brahmavihāre bhāvetvā kāyassa bheda param maraṇā **brahmalokūpago aho**si.

atha kho, Ānanda, rañño Makhādevassa putto bahunnam vassānam bahunnam vassasatānam bahunnam vassasahassānam accayena kappakam āmantesi: yadā me, samma kappaka, passeyyāsi sirasmim phalitāni jātāni, atha me āroceyyāsi ti. evam devā ti kho, Ānanda, kappako rañño Makhādevassa puttassa paccassosi. addasā kho, Ānanda, kappako bahunnam vassānam bahunnam vassasatānam bahunnam vassasahassānam accayena rañño Makhādevassa puttassa sirasmim phalitāni jātāni; disvā rañño Makhādevassa puttam etad avoca: pātubhūtā kho devassa devadūtā; dissanti sirasmim phalitāni jātāni ti. tena hi, samma kappaka, tāni phalitāni sādhuḥkam saṇḍāsena uddharitvā mama añjalismim patiṭṭhāpehi ti. evam devā ti kho, Ānanda, kappako rañño Makhādevassa puttassa paṭisutvā tāni phalitāni sādhuḥkam saṇḍāsena uddharitvā rañño Makhādevassa puttassa añjalismim patiṭṭhāpesi. atha kho, Ānanda, rañño Makhādevassa putto kappakassa gāṃavaram datvā jeṭṭhaputtam kumāram āmantāpetvā etad avoca: pātubhūtā kho me, tāta kumāra, devadūtā; dissanti sirasmim phalitāni jātāni. bhuttā kho pana me mānusakā kāmā; samayo dibbe kāme pariyesitum. ehi tvam, tāta kumāra, imam rajjam paṭipajja; aham pana kesamassum ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agāasmā anagāriyam pabbajissāmi. tena hi, tāta kumāra, yadā tvam pi passeyyāsi sirasmim phalitāni jātāni, atha kappakassa gāṃavaram datvā jeṭṭhaputtam kumāram sādhuḥkam rajje samanūsāsivā kesamassum ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agāasmā anagāriyam pabbajeyyāsi. yena me idam kalyāṇam vaṭṭam nihitam anuppa-vatteyyāsi, mā kho me tvam antimapuriso aho. yasmim kho, tāta kumāra, purisayuge vattamāne evarūpassa kalyāṇassa vaṭṭassa samuccheto hoti, so tesam antimapuriso hoti; tan tāham, tāta kumāra, evam vadāmi: yena me idam kalyāṇam vaṭṭam nihitam anuppa-vatteyyāsi, mā kho me tvam antimapuriso aho ti.

Atha kho, Ānanda, rañño Makhādevassa putto kappakassa gāṃavaram datvā jeṭṭhaputtam kumāram sādhuḥkam rajje samanūsāsivā imasmim yeva Makhādevambavane kesamassum ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agāasmā anagāriyam pabbaji. so mettāsahagatena cetasā ekaṃ disam pharitvā viḥāsi, tathā dutiyam, tathā tatiyam, tathā catutthim; iti uddham adho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantam lokam mettāsahagatena cetasā vipulena mahaggaṭena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā viḥāsi, karuṇāsahagatena cetasā — pe — muditāsahagatena cetasā, upekkāsahagatena cetasā ekaṃ disam pharitvā viḥāsi, tathā dutiyam, tathā tatiyam, tathā catutthim; iti uddham adho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantam lokam upekkāsahagatena cetasā vipulena mahaggaṭena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā viḥāsi. rañño kho pan', Ānanda, Makhādevassa putto caturāsītivassasahassāni kumārakīlikam kīli; caturāsītivassa-

sahassāni oparajjaṃ kāresi, caturāsītivassasahassāni rajjaṃ kāresi, caturāsītivassasahassāni imasmiṃ yeva Makhādevambavane agārasmā anagāriyaṃ pabbajito brahmacariyaṃ cari. so cattāro brahmavihāre bhāvetvā kāyassa bhedaṃ param maraṇā brahmalokūpago ahoṣi.

rañño kho paṇḍita, Ānanda, Makhādevassa puttapaputtakā tassa paramparā caturāsītikhattiya-sahassāni imasmiṃ yeva Makhādevambavane kesamassuṃ ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyaṃ pabbajissu. te mettāsahagatena cetasā ekaṃ disaṃ pharitvā viharissu, tathā dutiyaṃ, tathā tatiyaṃ, tathā catutthiṃ; iti uddham adho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantāṃ lokāṃ mettāsahagatena cetasā vipulena mahaggatena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā viharissu, karuṇāsahagatena cetasā mudītāsahagatena cetasā, upekkhāsahagatena cetasā ekaṃ disaṃ pharitvā viharissu, tathā dutiyaṃ, tathā tatiyaṃ, tathā catutthiṃ; iti uddhamadho tiriyaṃ sabbadhi sabbattatāya sabbāvantāṃ lokāṃ upekkhāsahagatena cetasā vipulena mahaggatena appamāṇena averena avyāpajjhena pharitvā viharissu. te caturāsītivassasahassāni kumārakīlikaṃ kīlissu, caturāsītivassasahassāni oparajjaṃ kāresuṃ, caturāsītivassasahassāni rajjaṃ kāresuṃ, caturāsītivassasahassāni imasmiṃ Makhādevambavane agārasmā anagāriyaṃ pabbajitā brahmacariṃ carissu. te cattāro brahmavihāre bhāvetvā kāyassa bhedaṃ param maraṇā brahmalokūpagā ahesuṃ. (MN II: 74, 1.24-78, 1.27)<sup>17</sup>

[漢訳]: 『中阿含經』卷第十四「大天捺林經」

「彼時、世尊告曰、阿難。在昔異時此彌薩羅捺林之中、於彼有王、名曰大天、為轉輪王、聰明智慧、有四種軍、整御天下、由己自在、如法法王成就七寶、得人四種如意之德。

[中略]

阿難。彼大天王則於後時告剃鬚人、汝若見我頭生白髮者、便可啟我。於是、剃鬚人受王教已、而於後時沐浴王頭、見生白髮、見已、啟曰、天王。當知天使已至、頭生白髮。彼大天王復告剃鬚人、汝持金鐮徐拔白髮、著吾手中。時、剃鬚人聞王教已、即以金鐮徐拔白髮、著王手中。阿難。彼大天王手捧白髮而說頌曰、

我頭生白髮 壽命轉衰減 天使已來至 我今學道時

阿難。彼大天王見白髮已、告太子曰、太子。當知天使已至、頭生白髮。太子。我已得人間欲、今當復求天上之欲。太子。我欲剃除鬚髮、著袈裟衣、至信、捨家、無家、學道。太子。我今以此四天下付授於汝、汝當如法治化、莫以非法、無令國中有諸惡業、非梵行人。太子。汝後若見天使已至、頭生白髮者、汝當復以此國政授汝太子、善教勅之。授太子國已、汝亦當復剃除鬚髮、著袈裟衣、至信、捨家、無家、學道。太子。我今為汝轉此相繼之法、汝亦當復轉此相繼之法、莫令人民墮在極邊。太子。云何我今為汝轉此相繼之法、汝亦當復轉此相繼之法、莫令人民墮在極邊。太子。若此國中傳授法絕、不復續者、是名人民墮在極邊。太子。以是之故、我今為汝轉。太子。我已為汝轉此相繼之法、汝亦當復轉此相繼之法、莫令人民墮在極邊。

<sup>17</sup> この部分の英訳については、Horner (1957: 267-270) を参照。

阿難。彼大天王以此國政付授太子，善教勅已，便剃除鬚髮，著袈裟衣，至信、捨家、無家、學道，學仙人王修行梵行，在此彌薩羅大天椽林中。彼亦轉輪王，成就七寶，得人四種如意之德。云何成就七寶，得人四種如意之德。如前所說七寶，得人四種如意之德。

阿難。彼轉輪王亦於後時告剃鬚人，汝若見我頭生白髮者，便可啟我。於是，剃鬚人受王教已，而於後時沐浴王頭，見生白髮，見已，啟曰，天王。當知天使已至，頭生白髮。彼轉輪王復告剃鬚人，汝持金鐮徐拔白髮，著吾手中。時，剃鬚人聞王教已，即以金鐮徐拔白髮，著王手中。阿難。彼轉輪王手捧白髮而說頌曰，

我頭生白髮 壽命轉衰減 天使已來至 我今學道時

阿難。彼轉輪王見白髮已，告太子曰，太子。當知天使已至，頭生白髮。太子。我已得人間欲，今當復求天上之欲。太子。我欲剃除鬚髮，著袈裟衣，至信、捨家、無家、學道，我今以此四天下付授於汝，汝當如法治化，莫以非法，無令國中有諸惡業、非梵行人。太子。汝後若見天使已至，頭生白髮者，汝亦當復以此國政授汝太子，善教勅之。授太子國已，汝亦當復剃除鬚髮，著袈裟衣，至信、捨家、無家、學道。太子。我今為汝轉此相繼之法，汝亦當復轉此相繼之法，莫令人民墮在極邊。太子。云何我今為汝轉此相繼之法，汝亦當復轉此相繼之法，莫令人民墮在極邊。太子。若此國中傳授法絕，不復續者，是名人民墮在極邊。太子。以是之故，我今為汝轉。太子。我已為汝轉此相繼之法，汝亦當復轉此相繼之法，莫令人民墮在極邊。

阿難。彼轉輪王以此國政付授太子，善教勅已，便剃除鬚髮，著袈裟衣，至信、捨家、無家、學道，學仙人王修行梵行，在此彌薩羅大天椽林中。

阿難。是為從子至子，從孫至孫，從族至族，從見至見，展轉八萬四千轉輪王，剃除鬚髮，著袈裟衣，至信、捨家、無家、學道，學仙人王修行梵行，在此彌薩羅大天椽林中。」

(T.01, no. 26, 511c28-514b08)

以上の引用から、トカラ語 A 断片 A128 + A130a1-b2 の内容が《Mahādevasūtra》に対応する事が窺える。次節では、この比定が仏教史研究に対して有する意味を検討したい。

#### 4. ドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A128 + A130 の位置付けについて

前節では、トカラ語 A 断片 A128 + A130a1-b2 の内容が《Mahādevasūtra》に対応する点を確認した。本節では、この比定が仏教史研究に対して有する意義について検討する。まず、この断片が発見されたシオルチュク地域において、この写本が編纂された当時、現地の仏教徒に《Mahādevasūtra》が知られていた点を挙げる事ができるが、より重要な点として、転写に対する注釈(13)で言及したように、主人公の子孫である国王が歴代 Mahādeva を名乗ったという記述から、ここに引用された《Mahādevasūtra》と根本説一切有部との密接な繋がりが指摘される。即ち、現在知られている《Mahādevasūtra》に関連する仏典では、根本説一切有部の『菓事』に引用されたものだけが、主人公とその子孫が Mahādeva と名乗った点に言及しており、この点はトカラ語 A における引用部分と一致する。トカラ語 A 仏典には根本

説一切有部との関連を示す資料の存在が他にも指摘されており<sup>18</sup>、A128 + A130a1-b2 における引用もそれらと同様に、根本説一切有部の系統に属する資料より引用されたと見られる<sup>19</sup>。なお、Chung and Fukita (2011: 83-84) によれば、中央アジア出土梵語断片中には本經典に比定される断片は見つかっておらず、トカラ語 A 断片 A128 + A130a1-b2 における引用は、新疆地域にこの仏典が流布していた事を示すものとして貴重である。

また、荻原 (2013) で指摘したように、現在までに比定されているトカラ語仏典には梵語との二言語併用文書は知られているものの、トカラ語のみで書かれた阿含經典は非常に少なく、阿含經典は単独でトカラ語に訳される事は少なかったようであるが、ここに引用された《Mahādevasūtra》は根本説一切有部の阿含經典に基づいていた可能性があり<sup>20</sup>、トカラ仏教徒がどのように阿含經典を利用したかの一端を窺わせる。即ち、荻原 (2009) で指摘したように<sup>21</sup>、トカラ語 A 仏典では物語の一部として文脈に関連する阿含經典を引用する例が確認されており、A128 + A130a1-b2 についても、この部分に後続する部分は《Mahādevasūtra》には対応箇所が見出せない事から、物語の展開によって引用されたものである事が窺える。ここで中心となっている物語は仏陀の異母兄弟・難陀とその妻スンダリーを主人公としており、馬鳴による《Saundarananda》に関連する主題であるとされているが、A128 + A130b3-6 の内容から、この folio に先行する場面では仏陀が難陀に出家を促していたと考えられる。

<sup>18</sup> トカラ語仏典と根本説一切有部との繋がりに関する最新の研究としては、Ogihara (2015) を参照。

<sup>19</sup> 八尾 (2007) が指摘するように、『菓事』に引用された《Mahādevasūtra》は根本説一切有部の『中阿含』から引用されたものであるため、トカラ語 A 仏典における同経もこの部派の『中阿含』か、或いは単経として流布していたものに基づいていたと見られる。なお、四無量心や梵天界への再生といった他部派の伝承との一致(脚注 4 で言及したコータン語『ザンバスタの書』第 24 章第 53 詩節にはニミ王の梵天界への再生が説かれる)や、「王冠を長子の頭に置く」という表現や転輪聖王の所有物についての言及といった根本説一切有部の《Mahādevasūtra》には見られない内容が A128 + A130a2-a6 には見られる事から、ここに引用された内容は根本説一切有部の『中阿含』に属する《Mahādevasūtra》そのものではなく、根本説一切有部に近い関係を有する一派の伝承、或いはパーリ仏典において Majjhimanikāya と Jātaka の両方に Makhādeva の話が見られるように、根本説一切有部には属するが、『中阿含』ではない伝承を反映する可能性も考慮に入れる必要がある点を八尾史博士からご指摘頂いた。ここに記して、篤くお礼申し上げる。ただし、これらの要素が引用の元となった伝承ではなく、この地域の仏教徒によって増広のために用いられていた定型句であり、それらを適宜利用した可能性も排除されない(《Maitreyasamitināṭaka》に属するトカラ語 A 断片 A256a3 では、譲位の際に Simha 王が長子 Udrāṇa に王冠を授けている)。また、トカラ語 A には『入母胎経 (Garbhāvākraṇṭisūtra)』に比定される断片が 10 点弱知られているが、梵語・パーリ語・漢訳・藏訳の各仏典に見られる難陀とスンダリーの物語の内、『根本説一切有部律雜事』中の物語にのみ、この仏典が引用されている点を Yamasaki (2009: 1209) が指摘している。この事実は、『入母胎経』に属するとされているトカラ語 A 断片も《Saundaranandacaritanāṭaka》に属する可能性だけでなく、《Saundaranandacaritanāṭaka》という作品そのものと根本説一切有部との繋がりをも示唆する。

<sup>20</sup> 藏訳『菓事』の原典となった根本説一切有部の梵語による『菓事』に基づいていた可能性も完全には否定されないが、現在までのところ、このような梵本は発見されていない。なお、藏訳『菓事』では経名を挙げずに《Mahādevasūtra》を引用するが、八尾 (2013b) が紹介する新出の梵文『菓事』断片では経名を挙げた上で省略しているだけでなく、既知の漢訳及び藏訳とも一致しない内容も伝えており、複数の梵本の存在を示している。この点をご教示頂いた八尾史博士には、篤くお礼申し上げます。一方、荻原 (2014b) で扱った《Maitreyasamitināṭaka》に属するトカラ語 A 断片 A256 に引用された過去仏のリストは、相違が見られるものの、漢訳及び藏訳『菓事』とかなり良く一致している。

<sup>21</sup> ここでは、トカラ語文献研究において《Punyavantaṭāṭaka》と称される作品に、所謂《Śikhālakasūtra》が引用されている点を明らかにすると共に、トカラ語 A に訳された引用詩節中に、新疆で発見された梵語断片とのみ一致する部分が見られる点を指摘した。



前節での引用から、ここに引用されている《Mahādevasūtra》の主題は世俗からの出家であり<sup>22</sup>、難陀に出家を促す文脈で主題を増広するために用いられたと推定される<sup>23</sup>。以上のような筆者の推定が正しいならば、A128 + A130a1-b2 はトカラ語 A 仏典における經典引用の新たな例と見做す事ができ、荻原 (2009) と併せて考えれば、主題と関連する他仏典からの引用は、トカラ仏教における仏典創作の方法の一つであったと言える<sup>24</sup>。

## 5. 結論

本稿では、トカラ語文献研究において《Saundaranandacaritanāṭaka》と称されるトカラ語 A の作品に属するドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A128 + A130a1-b2 に、《Mahādevasūtra》という経名の仏典が引用されている点を、対応するパーリ語・漢訳仏典を利用して明らかにすると共に、蔵訳『薬事』にのみ見られる主人公とその子孫が歴代 Mahādeva を名乗ったという記述から、トカラ語 A 写本に引用された当該仏典が根本説一切有部の系統に属すると見られる点を指摘した。また、この比定によって、トカラ語 A 断片 A128 及び A130 が同一の folio に属する点が明らかになった。この二点の断片が同一の folio に属する点はこれまでトカラ語研究者には知られておらず、従来充分には理解されていなかった文脈をより良く理解する事が可能となった。なお、当該 folio に引用された《Mahādevasūtra》は、『薬事』及び『俱舍論註ウパーイカー』の記述によって根本説一切有部の『中阿含』に属する事が知られているため、トカラ語 A 写本中の引用もこの部派の『中阿含』或いは単経として流布していたものに基づいている可能性が指摘されると共に、本經典が新疆地域でも知られていた事が裏付けられる。現在までのところ、中央アジア出土梵語断片にはこの仏典に対応する断片は知られていないが、本稿で指摘したトカラ語 A 写本中における引用はこの地域に流布していた内容を反映すると考えられるため、当該仏典の増広と流布について歴史的に研究する上で重要な資料であると言える。

一方、トカラ語 A 仏典における他仏典からの引用は他にも知られている事から、A128 + A130a1-b2 に見られる《Mahādevasūtra》の引用は、主題と関連する他仏典からの引用がトカラ仏教における仏典創作の方法の一つであった点を裏付ける。このような他仏典からの引用は他の断片にも存在している可能性が高く、同様の事例を今後より多く明らかにする事が、トカラ語仏典の仏教史における位置づけを解明する上で必要である。

## 参考文献

BHSD = Edgerton, Franklin (1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit grammar and dictionary*. Vol. II: *Dictionary*. New Haven: Yale University Press.

<sup>22</sup> 《Mahādevasūtra》の主題については、入山 (1998) を参照。

<sup>23</sup> 《Saundarananda》Canto V 第 38 詩節: *rājarṣayas te viditā na nūnaṃ vanāni ye śiśriyre hasantaḥ | niṣṭhīrya kāmān upaśāntikāmāḥ kameṣu naivaṃ kṛpaṇeṣu saktāḥ* || 「しからば汝は王仙等のたのしみで森林に依り、愛欲を吐き捨てて寂静を好み、かくのごとく悲惨なる愛欲に執せざるを知らざるや」(松涛 1981: 40-41) を参照。

<sup>24</sup> 主題と関連する他仏典からの引用によって新しい仏典を創作する方法は、トカラ語に限らず、梵語・漢語・蔵語やソグド語・コータン語にも見られる。

- Carling, Gerd (2009) *Dictionary and thesaurus of Tocharian A*. Volume 1: A-J. in collaboration with Georges-Jean Pinault and Werner Winter. Wiesbaden: Harrassowitz.
- CETOM = *A Comprehensive edition of Tocharian manuscripts*, see <http://www.univie.ac.at/tocharian/?home>. (2017 年 3 月 6 日閲覧)
- Chung, Jin-il and Takamichi Fukita (2011) *A survey of the Sanskrit fragments corresponding to the Chinese Madhyamāgama: including references to Sanskrit parallels, citations, numerical categories of doctrinal concepts, and stock phrases*. Tokyo: Sankibo.
- DN = *Dīgha-nikāya*. Pali Text Society.
- Emmerick, R. E. (1968) *Book of Zambasta*. London: Oxford University Press.
- 藤田宏達 (1954) 「轉輪聖王について: 原始佛教聖典を中心として」 宮本正尊教授還暦記念論文集『印度学佛教学論集』東京: 三省堂, 145-156.
- GM III-1 = Nalinaksha Dutt (1947) *Gilgit manuscripts*. Vol. III. Part 1. Srinagar: Sri Satguru Publications.
- 本庄良文 (2014) 『俱舍論註ウパーイカーの研究 訳註篇上』東京: 大蔵出版.
- Horner, I. B. (1957) *The collection of the middle length sayings (Majjhima-nikāya)*. Vol. II: *The middle fifty discourses (Majjhimaṇṇāsa)*. Oxford: Pali Text Society.
- IDP = *The International Dunhuang Project*, see <http://idp.bl.uk/>. (2017 年 3 月 6 日閲覧)
- 入山淳子 (1998) 「Makhādevasutta と『大天榛林経』」『東洋文化研究所紀要』135: 105-145.
- 松涛誠廉 (1981) 『馬鳴 端正なる難陀』東京: 山喜房仏書林.
- MN = *Majjhima-nikāya*. Pali Text Society.
- MW = Monier-Williams, Monier (1899) *Sanskrit-English dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- 荻原裕敏 (2009) 「トカラ語 A «*Puṇyavanta-Jātaka*» に於ける阿含經典の引用について」『東京大学言語学論集』28: 133-171.
- 荻原裕敏 (2013) 「阿含經典に関連する三点のトカラ語 B 断片について」『東京大学言語学論集』34 (eTULIP). See <http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#54-0>
- Ogihara Hirotoshi (2014a) Fragments of secular documents in Tocharian A. *Tocharian and Indo-European Studies* 15: 103-129.
- 荻原裕敏 (2014b) 「吐火羅語文献所見仏名系列-以出土仏典与庫木吐喇窟群区第 34 窟榜題為例-」『西域文史』第九輯: 33-49.
- Ogihara Hirotoshi (2015) The Transmission of Buddhist texts to Tocharian Buddhism. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 38: 295-312.
- Poucha, Pavel (1955) *Thesaurus linguae tocharicae dialecti A*. Praha: Státní Pedagogické Nakladatelství.
- SBhV I = Gnoli, Raniero (1977) *The Gilgit manuscript of the Saṅghabhedavastu being the 17th and last section of the vinaya of the Mūlasarvāstivādin. Part I*. Roma: Istituto italiano per il medio ed estremo oriente.

SSS = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1931) *Tocharische Grammatik. Im Auftrage der Preußischen Akademie der Wissenschaften, bearbeitet in Gemeinschaft mit Wilhelm Schulze.* Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

T. = *Taishō Tripitaka*.

Thomas, Werner (1964) *Tocharisches Elementarbuch. Band II. Texte und Glossar.* Heidelberg: Winter.

Thomas, Werner (1986) Zur Stellung von toch. A *num*, B *nano* „wieder“ innerhalb des Satzes. *Zeitschrift für Vergleichende Sprachforschung* 99: 117-146.

TITUS = *Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien*, see

<http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/tocharic/tht.htm>. (2017 年 3 月 6 日閲覧)

TochSprR(A) = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1921) *Tocharische Sprachreste. I. Band: Die Texte, A. Transkription; B. Tafeln.* Berlin und Leipzig: de Gruyter.

TochSprR(A)Sieg = CETOM で公開されている Sieg 所有の TochSprR(A).

Yamasaki Kazuho (2009) On the versions of the story of Sundarī and Nanda. 『印度學佛教學研究』 57(3): 1206-1210.

八尾史 (2007) 「根本説一切有部律に引用される *Mahādevasūtra* —テキストおよび訳注—」 『東洋文化研究所紀要』 第 152 冊: 380-321.

八尾史 (2013a) 『根本説一切有部律彙事』 東京: 連合出版.

八尾史 (2013b) A brief note on the newly found Sanskrit fragments of the Bhaiṣajyavastu of the Mūlasarvāstivāda-vinaya. 『印度學佛教學研究』 61(3): 1130-1135.

#### [追記]

(1) 『東京大学言語学論集』 第 37 号で発表した拙稿「ベゼクリク第 20 窟誓願図のトカラ語題記について」において、筆者はクチャのクムトラ石窟窟群区第 79 窟主室前壁窟門左側（中国における石窟記述の方法では右側）に描かれたウイグル人供養人像に対して附されたブラーフミー文字題記の解釈を紹介したが、その後、慶昭蓉博士と中国語版の準備を行っていた際、別の解釈が存在する可能性を認識したため、以下別案を追加する。当該題記について、前掲拙稿 205 頁では以下のように解釈した（この題記は三言語で書かれており、ブラーフミー文字と共に附された漢文及びウイグル語題記の解釈も引用する）。

#### [Transliteration]

/// ·y· pyai enku s[tm]au [s]te [daṇa]pa[t]iyya e<sub>l</sub> sli<sub>k</sub> hkuñcu<sup>a</sup><sub>y</sub> | a[ra]ñciṣṣ[e]  
pr· [ce]r<sub>1</sub> tirrak<sub>1</sub> bh[a]ki c· r<sub>1</sub> | s· n[phu] e<sub>l</sub> hk· ñcu[y] |

#### [Transcription]

/// (p)y(ā)pyai enku s[tm]au [s]te [daṇa]pa[t]iyya el sli<sub>k</sub> hkuñcu<sub>y</sub> | a[ra]ñciṣṣ[e]  
pr(o)[ce]r tirrak bh[a]ki c(o)r | s(i)n[phu] el hk(u)ñcu[y] |

[和訳]

[...] 花を持ち佇んだ(或いは「佇んでいる」) 供養者エル=シリッグ公主 | 親愛なる兄弟、柱国たるベギ=チョル | 新婦エル公主

(頡里思力公主 *el silig kunčuy* | 同生阿[兄][弥][希][噉][帝][嚙] *ičimiz tiräk bāgi čor* | 新婦頡里公主 *el kunčuy*)

しかしながら、図版の再検討により、四人並んでいるウイグル人の先頭にいる男性の傍題の上方に花のような痕跡が認められる点に、慶昭蓉博士が気付いた。この人物に附された古代ウイグル語題記が花の茎の位置に相当しており、花の存在の有無を確定できないが、この解釈が正しければ、二人目の花を持つ女性に附された題記の[s]te と[daŋa]pa[t]iyya の間に見られる縦線は、筆者が考えたような損傷ではなく、後続する題記と同様に punctuation として使用される daŋda と解釈され、以下のように修正される<sup>25</sup>。

[Transliteration]

/// y· pyai eŋku s[tm]au [s]te [ | daŋa]pa[t]iyya e| sliḡ hkuŋcu<sup>a</sup> |  
a[ra]ŋciṣ[s[e] pr· [ce]r<sub>1</sub> tirrak<sub>1</sub> bh[a]ki c· r<sub>1</sub> | s· n[phu] e| hk· ŋcu[y] |

[Transcription]

/// (p)y(ā)pyai eŋku s[tm]au [s]te [ | daŋa]pa[t]iyya el sliḡ hkuŋcu |  
a[ra]ŋciṣ[s[e] pr(o)[ce]r tirrak bh[a]ki c(o)r | s(i)n[phu] el hk(u)ŋcu[y] |

[和訳]

花を持ち佇んだ(或いは「佇んでいる」) [...] | 供養者エル=シリッグ公主 | 親愛なる兄弟、柱国たるベギ=チョル | 新婦エル公主

(漢文・古代ウイグル語題記解読不能<sup>26</sup> | 頡里思力公主 *el silig kunčuy* | 同生阿[兄][弥][希][噉][帝][嚙] *ičimiz tiräk bāgi čor* | 新婦頡里公主 *el kunčuy*)

この解釈に従えば、このクチャ語題記は、描かれた四人の供養人像の内の残存する三人の人物に附された漢語及び古代ウイグル語の題記の内容とかなり良く一致する事となる。また、より重要な点として、二人目の花を持った女性に対する題記の「花を持ち佇んだ(或いは「佇んでいる」)」という修飾句は、二人目の女性ではなく、先行する一人目の男性に対する修飾句となり、二つの過去分詞が男性形になっている点が問題なく解釈されるだけでなく、古代ウイグル語による影響を考慮した「過去分詞 + copula」によって名詞が修飾されるという文法上の問題も解消される。

<sup>25</sup> 前掲拙稿では、対応するトカラ語題記が欠落していると見做していたため、一人目の供養人に対する漢文・古代ウイグル語題記については言及していない。

<sup>26</sup> 森安孝夫大阪大学名誉教授並びに松井太教授(大阪大学)より、出版されている図版では当該の古代ウイグル語題記に確実な読みを与える事は困難である旨、ご回答頂いた。解読を試みて頂いた両氏には、心よりお礼申し上げます。



ただし、ここで注意したいのは、クチャ地域で発見された供養人像に対する梵語及びクチャ語題記では通常人名に「クチャ王」などの肩書が附される事はあっても、このような修飾句が附される例は管見の限り存在しない点である。また、クチャ語の統語論から見た場合、この題記は[人名] + 関係詞 *k<sub>u</sub>se + (p)y(ā)pyai enku s[tm]au [s]te* と復元され、関係詞 *k<sub>u</sub>se* に導かれた関係節が先行詞の人名を修飾していたと考えられるが<sup>27</sup>、このような構文を採る題記も現在までのところ確認されていない。これらの点から見て、この題記が従来クチャ地域の石窟で見られるブラーフミー文字題記とは異なる特徴を有していると思われる点に変わりはない。なお、前掲拙稿で扱った題記に対する最新の解釈及び図版については、『敦煌吐魯番研究』第十七巻掲載予定の荻原裕敏・慶昭蓉「淺論庫木吐喇窟群區第 79 窟漢—婆羅謎—回鶻三文合璧榜題」を参照されたい。

(2) 『東京大学言語学論集』第 37 号電子版 (e-TULIP) にて、筆者は「ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 について」と題する拙稿を発表した。そこでは、ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 B384 が、蔵訳『根本説一切有部毘奈耶藥事』に引用される根本説一切有部の『中阿含』に属する《Nandīpālasūtra》と一致する記述を与えると共に、ウッタラの誓願とカーシャパによる授記にも言及する点を指摘した。また、後者の点について、『根本説一切有部毘奈耶出家事』がカーシャパによる授記に間接的に言及するのみであり<sup>28</sup>、前掲蔵訳『藥事』に引用される《Nandīpālasūtra》にはこれらについての言及が見られないことから、トゥルファンで発見されるトカラ語 B 仏典とベゼクリク第 20 窟誓願図は教義的基盤を共有していたと推定される点を論じた。その後、八尾史博士より、『出家事』と同様に蔵訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』がカーシャパによるウッタラへの授記に言及する点をご教示頂くと共に<sup>29</sup>、『藥事』がこの点についての言及を欠いている事実は、『中阿含』に属する《Nandīpālasūtra》とは別に何らかの形で授記を含む物語が流布しており、『出家事』及び『雜事』（さらにはトカラ語 B 断片 B384 も含まれるかも知れない）はこのような伝承を参照したと考えられる可能性をご指摘頂いた。ここに記して、篤くお礼申し上げる。

また、拙稿 e71-72 頁で語義不明とした Toch. B *sarrīwenta* に対して、Pinault は‘performance, show’という語義を提出した<sup>30</sup>。この解釈に従えば、B384a6 は「菩薩達は(人々を惹きつけるような)行いを起こすべきである」と解釈され得る。

<sup>27</sup> このような構文がクチャ語の関係詞構文ではなく、同じく後ろから先行する名詞を修飾する古代ウイグル語の関係詞 *kim* による影響である可能性も完全には排除されない。

<sup>28</sup> 拙稿 e72 頁 4 行目で言及した『出家事』における「ウッタラの誓願」は、「ウッタラへの授記」の誤りである。ここに拙稿での誤りを訂正する。

<sup>29</sup> 蔵訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』におけるカーシャパによるウッタラへの授記については、Yao Fumi “Dharmadinnā becomes a nun: A story of ordination by messenger from the Mūlasarvāstivāda Vinaya” (*Asian literature and translation*. Vol. 4-(1), 2017: 105-148) pp. 137-138 を参照。

<sup>30</sup> Georges-Jean Pinault, “The Tocharian background of Old Turkic *yaŋi kūn*” (E. Ragagnin et al. *Kutadgu nom bitig: Festschrift für Jens Peter Laut zum 60. Geburtstag*. Harrassowitz, 2015: 377-405) pp. 390-391 を参照。



Pl. 1: A128 + A130 (= THT761 + THT763)

Recto

Verso

## The *Mahādevasūtra* Quoted in the *Saundaranandacaritanāṭaka* in Tocharian A

Ogihara Hirotoši

Keywords: Tocharian Buddhist literature, Āgamasūtra, *Daitian nailinjing*, *Mahādevasūtra*

### Abstract

This paper aims to provide a novel interpretation of the Tocharian A fragments A128 and A130 (present inventory numbers: THT761 and THT763, respectively) housed in the Berlin Turfan collection. Since the 1921 publication of their transliterations in TochSprR(A), interpretations of these two fragments have never been offered, although some passages from the latter fragment have been quoted in previous studies in Tocharian grammar. Despite the gaps in some *akṣaras* between the two fragments, their identification as the *Mahādevasūtra* confirms that they belong to one and the same folio of the manuscript tentatively entitled the *Saundaranandacaritanāṭaka* in Tocharian philology. This fact has been unknown to the scholars of this field.

The present author offers revised transliterations of A128 and A130 and identifies lines a1-b2 of the folio restored from these two fragments as part of the *Mahādevasūtra* mainly on the basis of the *Mahādevasutta* in the *Majjhimanikāya* and the *Daitian nailinjing* in the Chinese *Madhyamāgama*. The absence of a counterpart in the *Mahādevasūtra* for the text of lines b3-6 of this folio leads us to suppose that the *Mahādevasūtra* would have been inserted in the story narrated in this manuscript. In addition, it is noteworthy that the *Mahādevasūtra* quoted in this Tocharian A manuscript agrees with the tradition transmitted in the *Bhaiṣajyavastu* of the *Mūlasarvāstivādins* which itself was quoted from the *Madhyamāgama* of this school as suggested by the fact that the hero and his descendants call themselves Mahādeva in this story. This fact shows the interrelation between Tocharian A Buddhist texts and the tradition of the *Mūlasarvāstivādins* and suggests that it was quoted from this sutra that prevailed in the Shorchuk region from where this Tocharian A manuscript was discovered.

(おぎはら・ひろとし 京都大学白眉センター/文学研究科)